

3. 江戸の都市構造

江戸が建設される過程については、すでに先号で述べたように、都合四次にわたっている。江戸の都市構造を考察する場合、その過程で最も問題となるのは、慶長8年(1603)、江戸を幕府地と定める時点での、その前後の変化である。具体的には第一次建設と、第二・三・四次建設との、都市構造上の基本的な変容で、言葉を改めれば徳川家一国の城下町建設の時代から、全国統合の幕府建設の時代への転換をいうのである。以下、その概要を紹介しよう。

第一次の江戸の都市構造は、かつて古代の日本が、先進国＝中国(隋ないしは唐)の律令体制導入時に理想とした都城制を復活させることより始まっている。

江戸の最終的な都市構造は、濠が江戸城を中核として〈の〉の字型(右渦巻型)に発展する様態をもっているのである。それを模式図化したのが図-7で、そこで城より東方に破線で囲まれた長方形内の部分が、ここでいう第一次の建設によるものである。城・大手門・本町を軸とする大手筋の構成、城下への堀川の導入形式など、すでに建設されていた秀吉の大坂(阪)・伏見城下、ないしは家康が後に行った駿府・名古屋の状態とよく相応しており、近世初頭(桃山時代)に日本人が一応理想とした都市計画の理念なるものを推知できる。それこそ都城制による平安京の方式で、具体的には「四神相応」の思想であった。

その「四神相応」の思想に関しては、かの近世軍学者の雄＝北条氏長の著『土鑑用法』(承応2年＝1653)にとりわけ強調されているところで、まず、

四神相応、堅固繁昌

なるを述べ、加えてさらに選地の要として、

繁昌勝地

北高南底、南北長東西短、東南西ニ水アルヲ云としている。

こうした選地原理のよところは、結局は中国の陰陽学であって、陰陽五行の説に基づき、日月支干の運行を考え、相生相刻の理を推しはかり、さらに吉凶を定め、そのよってきたる趨避を弁ずるのである。そこで、空間座標をトするに、「四神相応」であるを吉とした。中国の古典ではやくこれを説くは有名な『礼記』で、その曲礼上篇で、天子軍陣の四方に四神を描いた旗をたて、前方は陽であるから南の朱鳥、後は陰であるので北の玄武、左は陽で東の青龍、右は陰で西の白虎とした。この空間座標の考え方は、古く『史記』天官書にもみられ、

東宮一蒼帝 その精、龍にて流水をつかさどる。

南宮一赤帝 その精、朱鳥にて池溝をつかさどる。



新・郷土の土木 12

江戸城物語 (II)

内藤 昌 工博 名古屋工業大学教授 建築学科

西宮一白帝 その精、白虎にて大道をつかさどる。

北宮一黒帝 その精、玄武にて山をつかさどる。

とし、星宿を東西南北に分けた各宮へ、それぞれ四つの色名を冠した神が対応、さらにその精として龍以下四つの動物をあてている。この際四つの動物が選ばれたのは、聖人が人間を天地の本とし陰陽を端とする際に、鳥は天、龍は水、玄武は地、白虎は風とする世界の代表的生物とみなした結果という。

とにかく、この陰陽学でいう「四神相応」の思想は、そのままわが国にも導入される。

例えば、延暦 12 年 (793)、陰陽学に照じて造京使が平安新京の地に選んだ「山河襟帯、自然作成」となすところは、まさに四神に相応し、北方には船岡山があり玄武、東側に鴨川があって青龍、南方に巨椋池（現在は干拓されている）があって朱雀（鳥）、西に山陰・山陽両道が通じて白虎となり得た。

この思想が、単に軍事性を重視するばかりでなくして、政治性・経済性を優先して考えざるを得なくなってきた近世城下町における都市計画の理念に復活してきたわけで、特に江戸に関しては、『柳営秘鑑』に次のごとくある。

凡此江戸城、天下の城の格に叶ひ、其土地は四神相応に相叶ふり、先づ前は地面打開き、商賈の便り能き下町之賑ひは、前朱雀に習ひ、人の群り集る常盤橋、又龍の口の落口潔よきは、左青龍の流れを表し、往還の通路は、品川まで打續き、右白虎を表して虎門あり、うしろは山の手續き、玄武の勢ひ有、……

以上を念のため実際の状態を確かめてみると、玄武一朱雀の主軸は、東に大きく振れているが、当時日比谷入江が城下西南方にせまっていたし、平川の流路が江戸城の北方から東方にめぐっていたことなどを勘考すれば、かく変更された必然性も、よく理解できる。要するに、「四神相応」の理念を自然の地形にそって適宜あてはめていたわけであろう。

とにかく、大手門から常盤橋の軸を平安京の朱雀大路に比定すれば、平川は鴨川に、入国早々にして工事した道三堀は西堀川に対応する。さらに、本町一帯の町割は、『天正日記』によれば、平安京と同じく一町四十丈四方を基準単位とした。よって、武蔵野のうち続く麴町台地は玄武に、平川は青龍に、諸国の物産を海路集散する江戸湾は朱雀に、京へ通ずる東海道は白虎となり、第一次建設期の江戸の構成原理はここに明らかとなる。

なお後のことであるが、京の鬼門に比叡山延暦寺を配して王城鎮護の役を果たしたにない、江戸城の北東上野の山に東叡山寛永寺を設けている。このほか京の東山清水寺本堂になぞらえて寛永寺清水堂、方広寺大仏殿に寛永寺大仏殿、三十三間堂に浅草三十三間堂、琵琶湖竹

生島に不忍池弁天島、京の北方鞍馬寺に谷中感応寺、京の西方愛宕山に芝愛宕山が、それぞれに移されている。いかに京の都市像を江戸が意識したかを示す意味で、見逃すことはできないのである。

しかしながら、慶長 8 年 (1608)、江戸は幕府地として規模の拡大を飛躍的に行う必要にせまられる。これまでの第一次建設期の構成を骨子にしながらも、他にあまり類例をみない〈の〉の字型右渦巻の都市構成をとるに至るのである。

その町割を実施したテクノクラートは、大和法隆寺出身の御大工一中井正清であった。かれの父は、秀吉の大坂築城を指揮したり、さらには史上最大の建築物であっ

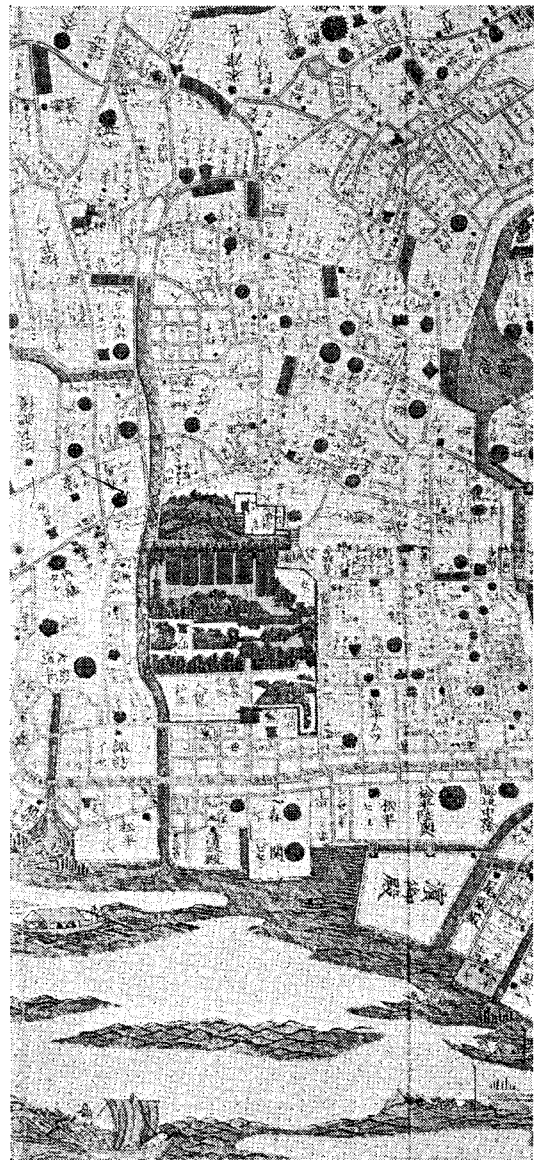


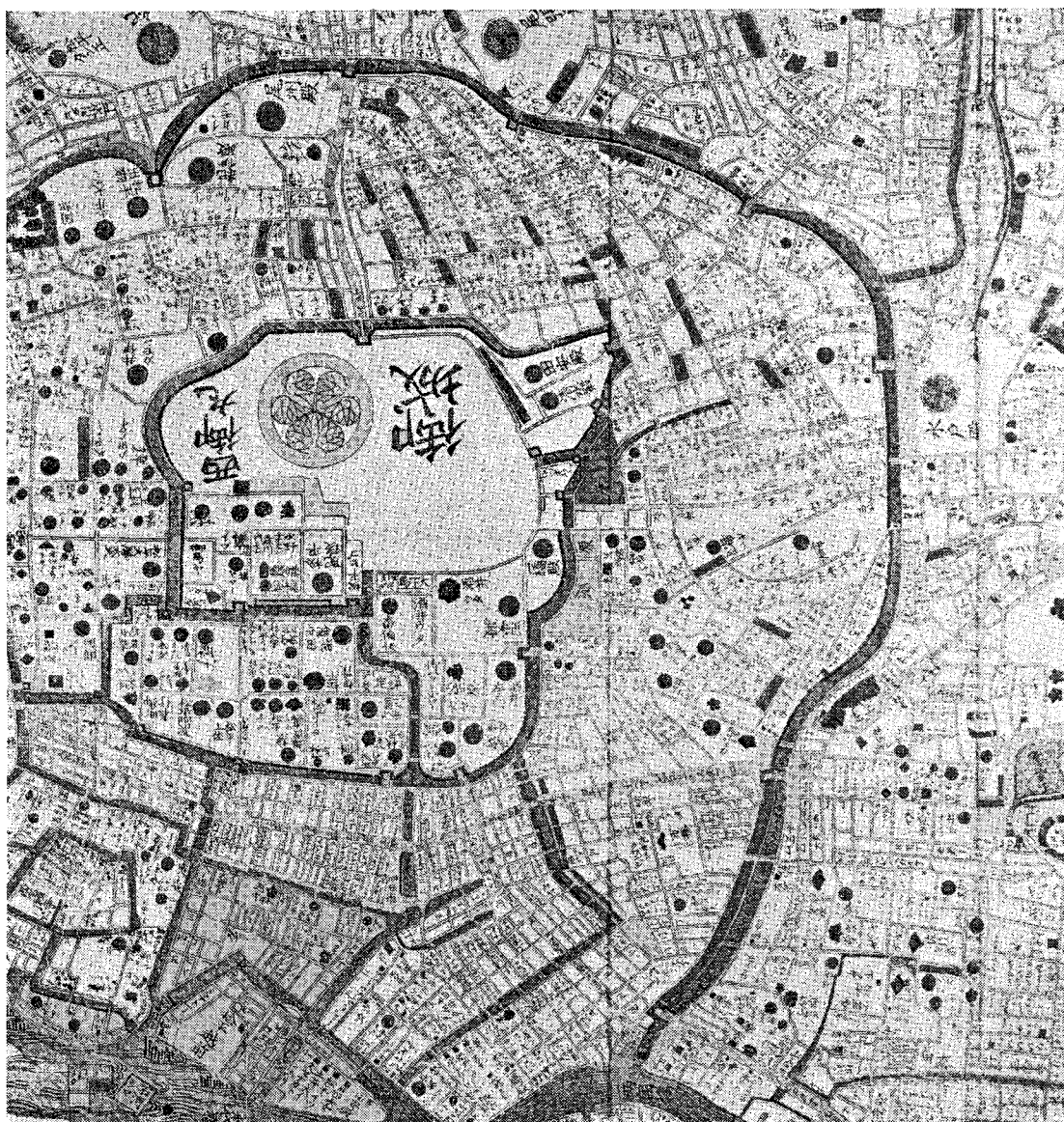
図-6 江戸

た例の東山方広寺大仏殿（現在ある東大寺大仏殿よりもふたまわりも大きい）の総棟梁をも勤めているほどの人物である。その教えを受けた正清は、京都の二条城・伏見城を作事し、今また江戸城にも関与したわけで、これ以後、駿府城・名古屋城を造営する当代一流の技術者であった。正清の後裔＝中井忠重氏蔵の文書中に、図一7下のような図が所伝され、江戸に右渦巻状の都市計画理念があったことが、明瞭にあとづけられる。これに従って、以来第二～四次の大土木工事が実施されたのである。

第一次計画の南方限であった日比谷入江は埋め立てられ、東北方限であった平川は、神田山を疎通して神田川

となすことによって、江戸城の外濠は大きく拡大されるのである。この工事がほぼ完了した寛永末年より正保期（1650年ころ）を時点として、今日の東京を原則的に規定している江戸の都市構成の基準を考察すれば、次のごとくである。

① 江戸城を中核として、この城を防御する濠は、右渦巻状に外延する。その過程で分節となっているのが、〈見附〉と呼ばれる施設である。俗に三十六見附といい、その内訳は、時代によって多少の変化はあるものの、内郭 10 個、外郭 26 個であった。それらの中で最も重要な見附は、江戸五口、すなわち東海道・甲州道中・中山道・奥州道中・上州道（これはのち中山道に含められる）



市街図（天保9年—1838）

の見附であり、既存の街道を江戸城中核に集約せしめ、しかも濠の渦線に結節せしめている。したがって、江戸の都市構成の骨格は、水路である渦巻上の濠と、放射状にのびる陸路とで綾なしているわけである。

② 中核部は、五重の大天守を幕府権力のシンボルとして、將軍家およびその親族で固められていた。將軍の居館である本丸・二丸・三丸、將軍の隠居(ときに世嗣)の邸館である西丸、そして御三家=尾張・紀伊・水戸=の屋敷がここに置かれた。ただし、明歴大火後、御三家の屋敷は、郭外に転出された。

③ 中核部の北方田安門より発して、清水門・雉子橋・一橋門・神田橋門……と続く右渦巻の最初の一巻は、江戸城を直接防衛し、あわせて幕政をつかさどる武士の居住地=武家地で占められる。武家地には、將軍直属の旗本・御家人の住区と、参勤交代で江戸につめる大名およびその家臣(將軍にとっては陪臣)の住区の二種類があるが、大名は更に関ヶ原役以前より徳川家につかえた譜

代と、以後に従った外様に分けられ、その住区はそれぞれに区別された。

④ 譜代大名は、江戸城の正門である大手門前に屋敷を持ち、ここは通称「大名小路」といわれた。なかでも幕政の中核である老中・若年寄など閣僚クラスの官邸として、本丸西丸大手・西丸大手の両門に近い「西丸下」が与えられていた。多くは松平諸家である。

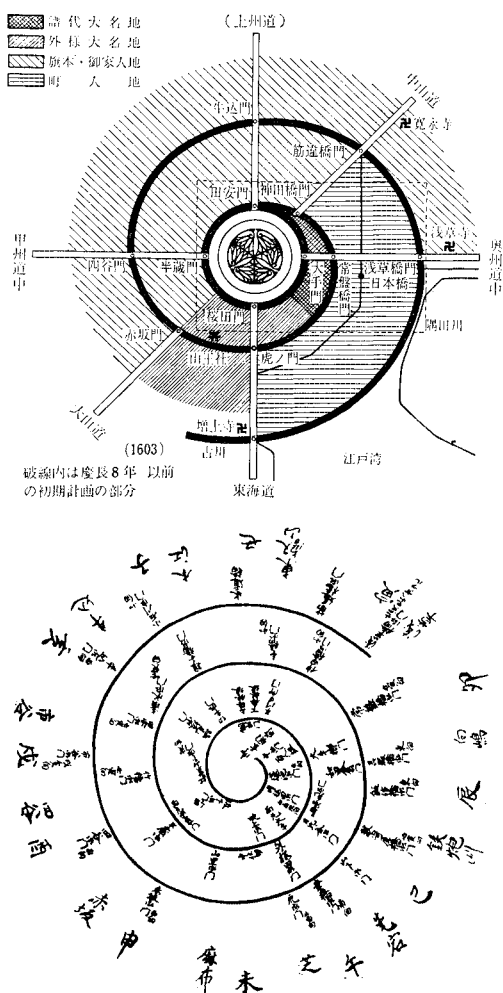
⑤ 大名小路の右渦巻の延長上には、日比谷門に区切られて、外様大名の屋敷が配された。日比谷・桜田・霞ヶ関付近一帯で、およそ溜池あたりまで続く。毛利・鍋島・島津・上杉・黒田・浅野・加藤などがここに屋敷を与えられていた。

⑥ 山下門・京橋門・虎ノ門・溜池と続いた外様大名地帯の濠をさらに右巻きしていくと、赤坂門・喰違門・四谷門・市ヶ谷門・牛込門・筋違門に達する。この一帯は旗本の屋敷地である。伊達政宗は、かつて秀忠の囲碁相手を勤めたとき、その勝負にかこつけて、江戸城を防御する場合の最弱点として本郷麴町方面を指摘したという逸話があるごとく、城の中核の西方から北方にかけては麴町台地があって川が少なく、自然の地形だけでは防備のかまきが不十分だったのである。そこで新たに濠をうがち、番町の名が示すように將軍直属の旗本を多量に配して周到な江戸城の防衛計画を立てていたのである。

⑦ 牛込門・筋違橋門で武家地が城中核部を一周してとり巻くが、さらにその先は、外郭濠として浅草橋門をへて隅田川に達する。そのまた先は、隅田川が外濠の機能をもって江戸湾に至る。この内側一帯は、既述した第一次建設期の外延部にあたり、武家地の消費生活を支える町人地があった。南の東海道・東の奥州道中・北の中山道は、日本橋を中心に「通町」で結ばれ、市中第一の繁華街となる。そして、通町に直交しながらも、江戸城中核に放射状に集まる堀を入れ、陸路・海路をとって全国の物産が荷揚げされたのである。

⑧ 江戸城の外郭には、南に外様大名(特に下屋敷・藏屋敷)、南西から北東にかけては旗本・御家人、北東から東南にかけては町人地と主要住区が定められたのであるが、その外濠周辺、特に街道筋においては、寺社が配されている。東海道の増上寺、大山道の日吉山王社、中山道の寛永寺、奥州道中の浅草寺などである。名所として市民遊楽の地域であり、同時に江戸中期以降門前町の発達をうながし、スプロールの要因となる。

以上の右渦巻状の都市構成は、近世城下町として異例の部類に属する。しかし、他に全く類例がないわけではなく、天下の名城といわれる姫路城・熊本城や、金沢城などもやや近似した構成をもつが、やはり城郭部分のみで、江戸城のごとく市街地全域には及ばない。それら地方都市は、防御力のみを計画の主眼にした、どちらかと



図一7 <の>の字型の都市構造模式図

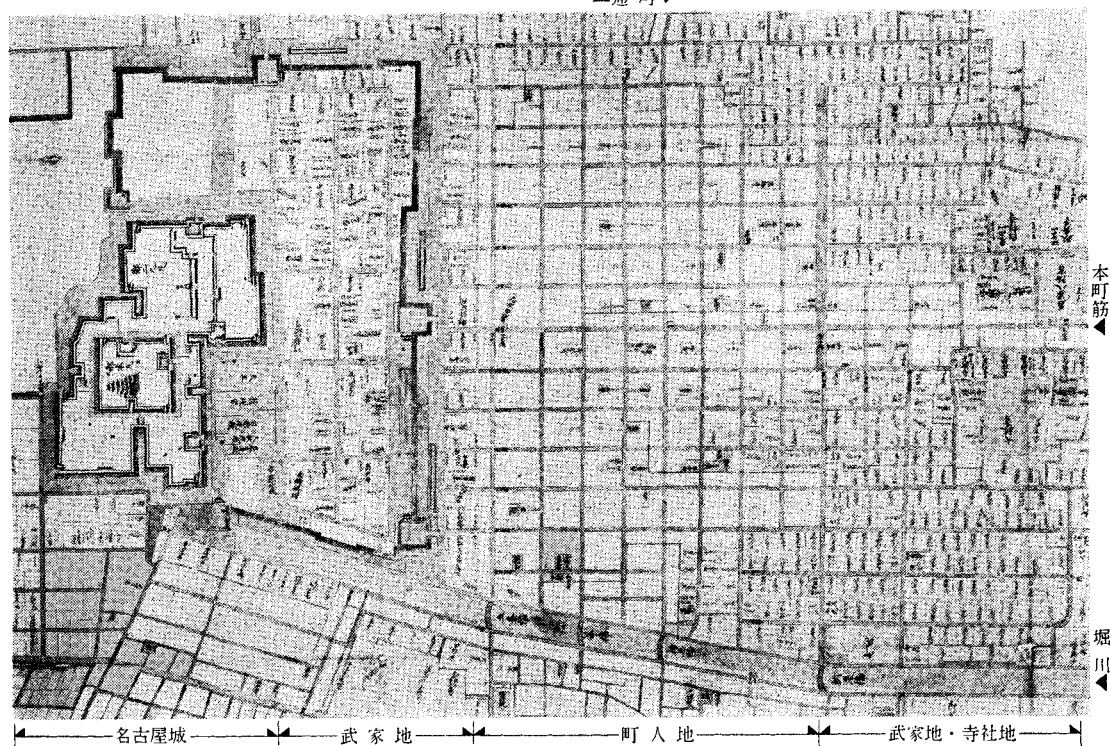
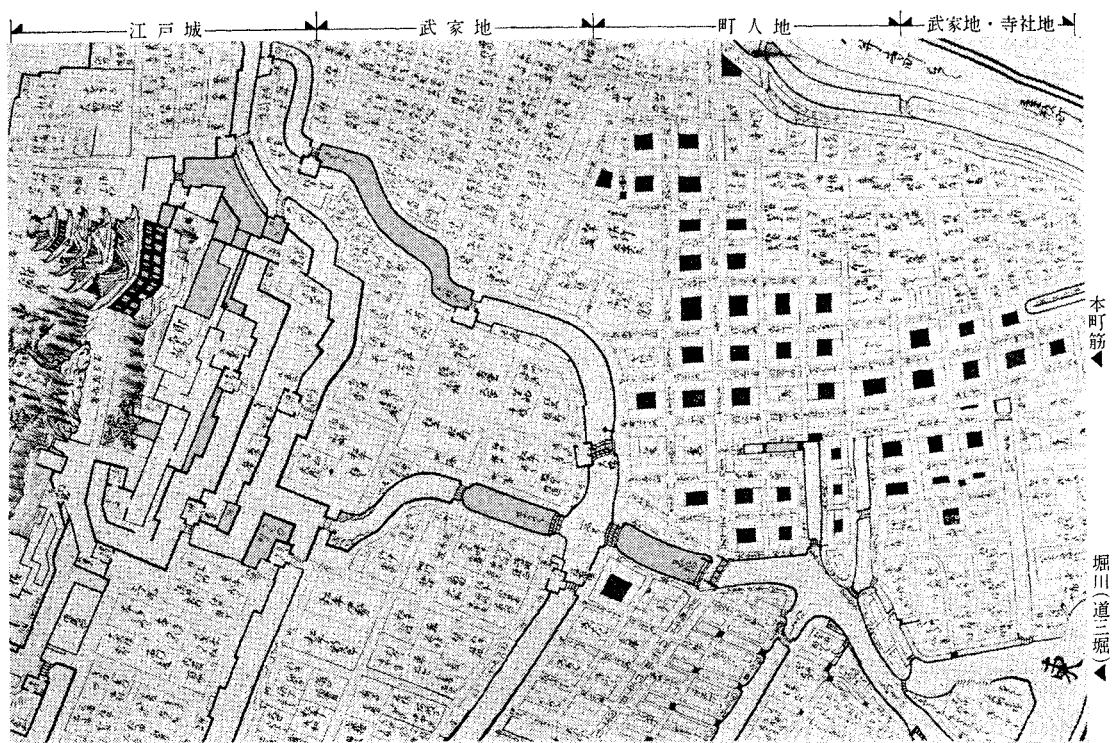


図-8 江戸と名古屋の都市構造比較

いえば中世的な山城に近い平山城の系統に属するものであって、政治性・経済性を重視した近世城下町としてはやはり江戸は異例であったといえよう。

それでは、大坂・駿府・名古屋のように、もしかりに江戸が当時の都市計画の常法に従っていたらどうなっていたであろうか。多くの武家地をかかえた江戸は、町人地と大きく二分されていたに違いない。広大な武家地をもちながらも町人地を中核に近接し得たのは、渦巻状の都市構成の結果にほかならない。町人地の経済活動を武家の消費生活に直接結びつけ、よく近世都市としての機能を、未曾有の都市規模で果たしていたわけである。その意味で、江戸の〈の〉の字型の都市計画は異例ではあるが、覇府の構えとして、まことに理にかなった方法と評価せざるを得ないのである。

4. 江戸の都市域——城・郭・場——

幕府所在地としての江戸の都市的性格を考えると、以上に述べた江戸城下町という小城についてのみ考える

ことは、必ずしも十分でない。さらに、交通網を含めた全国的機構での理解が必要であろう。

『柳営秘鑑』によれば、江戸を中心とした外域の構成について、次のような配慮があったことが知られる。

天下の城に城・郭・場の三つの意に叶へり、城と云は本城なり。又郭といふは、本城より十里内外の間に一つの嶮地を設く。東海道にては箱根なり。又場といふは、本城より三・四里隔てて要害を設く。謂ふ所六郷の川なり、千住の方にも利根川取出川等の固めあり。北国の方には笛吹峠有、是をおもとして、廿里四方に餘る地を分内として、則余を固めとするゆへ本城の縄張に管のみ構わず。……

まず、「城」の意義を求めて本城の規模についてみると、本丸・二丸・三丸・西丸・吹上（旧御三家屋敷）・北丸（旧代官屋敷地）を含めて表-1のごとくである。総計して 1.80 km² で、これは後述するが、江戸時代の全国城下町の平均規模に相当する。言葉を換えれば、江戸城は、内郭部分のみで一般の城下町なみの広さをもっていたわけで、いかに大規模なものであったか、ご理解いただけたと思う。

次いで、江戸の都市建設が終了した 1650 年ごろを目安にして江戸城下町の都市面積を復元的に計測してみると、表-2 のようになる。加えてその江戸の都市面積を他都市と比較する意味で、京都・大坂・仙台・名古屋・金沢のいわゆる大都市、それから中都市として津山、さらに史料的に判明する限りでの全国最小都市として日出の場合を計測してある。史料の関係から、必ずしも同年次の状況を把握できないのは残念であるが、

ほぼ 1650 年を前後する時期でのデータとしてみただけは幸いである。結果として判明した江戸の都市面積は、ある程度予想はしていたものの、他都市に比べてあまりにも大きい。全国の平均都市面積が約 2 km² 弱であるが、江戸はその 32 倍弱、極小の日出と比較すると実に 218 倍強に達する。先に述べた江戸城内郭面積が、全国の平均規

表-1 江戸城内郭面積

区 分	小 計 (km ²)	内 訳 (km ²)		備 考
		台 地	濠	
本 丸	0.19 (10.6)	0.13 (7.3)	0.06 (3.3)	三日月濠・蓮池濠・白鳥濠を含む
二 丸	0.12 (6.7)	0.07 (3.9)	0.05 (2.8)	梅林橋下より下梅林内・北橋・具橋・下乗橋・黄橋をへて蛤濠までを含む
三 丸	0.13 (7.2)	0.07 (3.9)	0.06 (3.3)	竹橋門より平川門・大手門をへて内桜田門前までの濠を含む
西 丸	0.33 (18.3)	0.24 (13.3)	0.09 (5.0)	坂下門前より西丸大手門をへて吹上門下までの濠、および道灌濠を含む
吹 上	0.69 (38.3)	0.49 (27.2)	0.20 (11.1)	吹上門下より半蔵門・千鳥ヶ淵までの濠を含む
北 丸	0.34 (18.9)	0.23 (12.8)	0.11 (6.1)	千鳥ヶ淵より田安門・清水門をへて竹橋門までの濠を含む
總 計	1.80 (100.0)	1.23 (68.3)	0.57 (31.7)	西丸下および大名小路は含まず

注：（ ）内の数字は総面積に対する百分率。

表-2 江戸時代初期（1650 頃）における諸都市の住区別面積

都 市 名	年代一	総面積* (km ²)	公家地 (km ²)	武家地 (km ²)	町人地 (km ²)	寺社地 (km ²)	空地 その他 (km ²)	復 原 史 料
大 都 市	江戸—寛文10~13年— 1670~1673	63.42 (100.0)	—	43.66 (68.9)	6.75 (10.6)	7.90 (12.4)	5.11 (8.1)	『新板江戸大絵図』『新板江戸外絵図』による
	京 都—正保年間— 1647 頃**	20.87 (100.0)	0.68 (3.3)	1.05 (5.0)	8.37 (40.1)	2.92 (14.0)	7.85 (37.6)	『寛永後万治前京都全図』(京都大学蔵中井家史料)による
	大 坂—明暦3年— 1657	14.16 (100.0)	—	3.36 (23.7)	7.40 (52.3)	1.18 (8.3)	2.22 (15.7)	『新板大坂之図』による
	仙 台—正保年間— 1647 頃	10.37 (100.0)	—	7.56 (72.9)	1.15 (11.1)	1.66 (16.0)	—	『陸奥国仙台城絵図』(斎藤報恩会蔵)による
	名古屋—万治年間— 1660 頃	9.20 (100.0)	—	5.69 (61.8)	2.18 (23.7)	1.14 (12.4)	0.19 (2.1)	『名古屋御城下絵図』(名古屋城管理事務所蔵)による
	金 沢—正保年間— 1647 頃	7.46 (100.0)	—	4.91 (65.8)	1.58 (21.2)	0.79 (10.6)	0.18 (2.4)	『加賀国金沢之絵図』(金沢市立図書館蔵)による
中 都 市	津 山—正保年間— 1647 頃	1.88 (100.0)	—	1.24 (66.0)	0.45 (23.9)	0.13 (6.9)	0.06 (3.2)	『美作国津山城絵図』(内閣文庫蔵)による
小 都 市	日 出—正保年間— 1647 頃	0.29 (100.0)	—	0.16 (55.2)	0.11 (37.9)	0.02 (6.9)	—	『豊後国日出城絵図』(内閣文庫蔵)による

注：① *印、本データは、復原史料圖に示す各都市絵圖を 1/10 000 現状圖に復原計測したものの。

② **印、京都の都市域は御土居内とする。為に空地が多いことに注意。

③ 表中の（ ）は百分率を示す。

模にほぼ等しいのは、この際特に興味深い。江戸に次いで全国第2位の京都に比べても、約3倍の規模を持ち、同時代の都市として江戸がいかに異常であり、超巨大であったかが判明するであろう。江戸は17世紀半ばにして、すでになりにスプロールの可能性を秘めていたことになる。それを機能的にも可能にしたのは、もとより〈の〉の字型右渦巻の都市計画あつてのことである。

この江戸市域の外延的なひろがりとは、一応享保期(1730年ころ)をピークとして、四里四方(半径2里、すなわち8km圏)に定状化する。その制御するところの要因は、江戸市民がもとより徒歩で1日に仕事を

して往復できる範囲内——1日生活圏——にかかわるものと考えられる。具体的には、江戸の端に住む市民が、他端へ往復する距離は8里(約32km)にて、1時間に1里歩くものと計算すれば、この規模にて、どうか1日の生活が完結できたのである。また、往復でなくして片道で到達できる範囲は、その倍8里四方(半径4里、すなわち16km圏)となるが、これが先掲『柳営秘鑑』での〈場〉に相当しよう。したがって、そこには必ずなんらかの関門があつた。金町と小岩の関所(御番所)、江戸川・荒川・多摩川の船渡しがそれである。東海道筋の多摩川の場合は、六郷の渡しなのであるが、幕府はここに慶長5年(1600)一度は架橋したものの、元禄年中洪水で流されて以来、決してこれをつくろうとしなかった。江戸城を中心とした〈場〉の意識が、のちのちまで存在していたことを物語っている。

ところで、当時人力の限りを尽くしたとして、1日の行動範囲はどの程度であつたであろうか。ことさらに問題になるのは、1日以内に知りうる情報の限界であろう。電信電話のない時代のことであるから、言伝と文書の送便によるわけで、いわゆる飛脚がその用をなした。飛脚

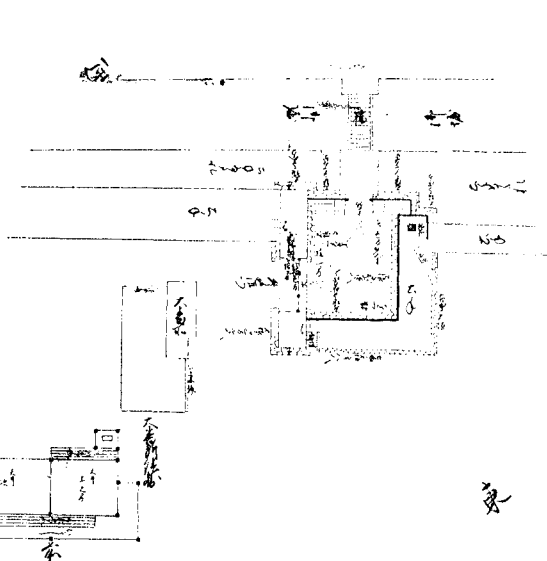


図-9 牛込門見附の図

は大別して三種あり、その第一は幕府公用にあてた「継飛脚」、第二は、諸大名が継飛脚に準じて設けた「大名飛脚」、第三は、民間で営業する「町飛脚」である。継飛脚は、御用という会符をもって道中に威勢を示したが、その1日の活動範囲が、東海道の箱根、中山道の碓氷の各関所を限界とする関東一円であつた。これこそ、先掲『柳営秘鑑』でいう江戸10里内外の〈郭〉であろう。

かくて江戸城は、城・郭・場の構成を整えて、天正18年(1590)から延々四次半世紀にわたる大工事を終えたのである。その土木工事の規模の雄大さは改めるまでもないが、自然の地形を最大限に活用しながらも、〈の〉の字型の都市構造にまとめ得た過程の、いきの長い計画性は、まさに驚嘆すべきものがある。俗に「国家百年の大計」というか、徳川幕府300年に近い大平は、こうした江戸築城による覇府の磐石の上に成り立っているを忘れてはならない。時代文化を築く歴史の重みとは、おそらくそういうものであろうし、それをなしてこそ、土木技術は、まさしく civil-engineering たり得たのである。

(次回は中部支部担当で「木曾三川物語」を連載予定)

●土木学会創立 60 周年記念出版●お申込みは主要書店または土木学会へ

土木学会日本の土木技術編集委員会編・土木学会刊

日本の土木技術——近代土木発展のながれ——3200 円

土木学会日本の土木地理編集委員会編・森北出版刊

日本の土木地理——国土への理解と認識のために——3200 円